

被助成者 (特活) 開発教育協会 ㊤

コード 番号	05-A-070
-----------	----------

NGOと宗教を結ぶ市民フォーラム「こころの開発・宗教・地球市民」

活動の目的

日本のNGOの活動には目覚ましいものがあり、若い世代の国際協力や市民活動への関心も高まっている。しかし活動の現場では時に過酷な状況があり、ボランティアを目指しながら挫折していく者も少なくない。ボランティアとは何かということ、様々な宗教のもつボランティアの考え方や精神を学ぶことがこれからの役に立つ。

また、2001年の同時多発テロ以降、宗教に対する不信感や恐怖心が高まった傾向も見受けられる。

こうしたことから、宗教に対する偏見を乗り越えようと共に、国際協力や地域づくりなどの活動に参加する層を増やすことを活動の目的とする。また、宗教者にとってはこれからの社会に宗教者としてどう関わっていくのか、示唆を得るきっかけとする。

活動の内容・実施経過

7月より実行委員会の立ち上げ準備をはじめ、国際協力NGOや教育系NGO、仏教系団体など、幅広い立場の人たちから参加を募った。

9月より本格的に実行委員会を立ち上げ、月1～2回のペースで会議を開催、企画をつめていった。

<講座の目的>

- ① 宗教とNGO・NPOに共通する「地球市民的な資質」を探り、地球市民としてこれからの社会へのかかわりを考える。
- ② 宗教に対する理解を深め、国際協力や地域づくりなどの活動における精神性について考える。

<対象>

- ・ 国際協力やボランティア活動を行っている人、関心のある人
- ・ 次の人生のステージに向けて、再出発を考えている人
- ・ 宗教のことをもっとよく知りたいと考えている人

<講座の特徴>

- ① 仏教、神道、イスラム教、新宗教など、様々な宗教について学べる。
- ② 講師陣は各宗教の専門家であり、ボランティアなどユニークな活動を行っている方々。
- ③ 寺院や神社、イスラム教のモスクなど各宗教施設を会場とし、宗教を肌で感じることができる。
- ④ 毎回参加者から感想や意見などのアンケートを収集し、次の回にリスト化して配布することで、より多くの考えに触れる機会をつくる。

また、講座当日には、主催団体の関係者及び一般参加者などから毎回10名前後のボランティアスタッフが運営に関わった。なお、以下の報告にある「参加者数」には、これらボランティアスタッフの数は含まれない。

参加者へのアンケートには運営面への意見も募り、問題点等について指摘されたことは可能な限り適宜改善を図った。そのことも参加者からの高い評価につながった。

<講座の概要>

開催時期：2006年2月2日～4月27日、全8回
主 催：(特活)開発教育協会、(特活)アーユス仏教国際協力ネットワーク

助 成：(財)庭野平和財団
協 力：(財)全国青少年教化協議会
実行委員会：福澤郁文(委員長：開発教育協会理事、
シャプラニール)、石川一喜(拓殖大学国際開
発教育センター)、枝木美香(アーユス仏教国
際協力ネットワーク)、神仁(全国青少年教化
協議会)、世古一穂(NPO研修・情報センタ
ー)、中本啓子(グリーン・マーケティング協
会)、山田かおり(開発教育協会)、渡部鋭幸
(曹洞宗僧侶)

■第1回 2006年2月2日(木)

テーマ：[宗教概論]

布施とボランティア=宗教入門

講 師：ひろさちや氏

会 場：築地本願寺蓮華殿(東京都中央区築地)

参加者：117名

講義の概要：

布施というのは、自分が持っているものを喜んで
捨てさせていただくことである。そこから、自分に
とって最も大切なものを施すことができるのか、と
問いを投げかける。諸宗教の成り立ちや特徴、「布
施」「ボランタリズム」に関する考え方を、巧みな
比喻と事例を用いながら解説。また、ボランティア
というものを宗教的に捉え、なんのためのボラン
ティアなのかという根源的な問いに宗教的見地から所
見が述べられた。

これから始まる各宗教についての各論をより深く
考えるためのきっかけとなる講演であった。

参加者の感想：

- ・ ボランティアと宗教の関係について考えさせら
れた。
- ・ 各宗教の特色をおもしろく解説していただいて、
よく分かった。
- ・ 仏教の考え方と開発との相通ずるところを発見
した。
- ・ よく分からないと思っていた宗教が少し身近に
なった。
- ・ ボランティアの精神を宗教から見たことはこれ
までなかったので、とてもよい機会になった。

- ・ ボランティア活動の基本、我々はどうしても与
える立場にたつクセがある。この基本スタンス
の間違いを指摘され、目からうろこだった。
- ・ 本当の布施、ボランティアというものが何かを
知ることができた。
- ・ これからの講座がより楽しみになった。
- ・ いろいろな宗教の方々と関わったボランティア
をするのであれば、自分もきちんとそれぞれの
「愛」の考えを学ぶ必要があると感じた。

■第2回 2月9日(木)

テーマ：[神道]

エンバイロメンタル・スピリチュアリティ

講 師：ケイト・ストロネル氏

会 場：神社本庁(東京都渋谷区代々木)

参加者：102名

講義の概要：

講師のケイト氏は、オーストラリア出身の女性神
主で、市民活動のなかで浅川金毘羅神社に出会い、
神道の精神性にふれて神主となった。

神道に対する偏見と固定観念にとらわれている日
本の社会に対して、自然(じねん)という神道の考
え方を紹介。「自然を守る」のではなく、「自然に
守られる」自分をみつけ、そこから神を感じる精神
性が育まれてくる。人が自然環境への敬意を持つこ
とができるならば、神道に対する考え方は大きく変
化する。儀式というもののもつ意味は神と自然と自
分との関係を表現し、感謝を表現する手段である
と言う考え方や神とはコミュニティの人々を中心と
なって生み出す宗教であることなど、新鮮な神道への
切り口が見える講演となった。

参加者の感想：

- ・ 神道に対する偏見があったが、話を聞いてい
ろいろな見方ができるのだとわかり、固定観
念が払拭された。
- ・ 環境への敬意という神道の考えを私たちがも
てれば、自然破壊などが防げるかもしれない。
- ・ 「人間は自然の一部である」「自然の支援
(サポート)を感じる」という言葉に説得力
があった。

- ・ 本来持っている神道の思想の良さが、天皇制、軍国主義、戦争と結びついてゆがめられていることに対し、もどかしさを覚える。

■第3回2月16日(木)

テーマ：[ヒンドゥー教]

ヒンドゥー・ナショナリズムと公共善

講師：小川忠氏

会場：築地本願寺講堂（東京都中央区築地）

参加者：96名

講義の概要：

ヒンドゥー教はひとつの宗教と考えられるのか、英国の植民地政策によって形成されたヒンドゥー意識やカースト意識など、多様な側面を持つインドの宗教について概観。ガンディーに代表される近代文明批判から様々な社会運動の成り立ちまで、公共善としての意識と社会活動を解説された。そして近年の宗教ナショナリズムの台頭など、宗教と政治や社会との関わりなど、日本の社会とは異なる影響力についての講演となった。

参加者の感想：

- ・ 日本人にとってヒンドゥー教は遠いと思っていたが、実は近いものだと知り驚いた。
- ・ 「誇りの不平等」が宗派間暴動の原因のひとつになっている、という見方は同感である。
- ・ 「相互理解とは、慎重に細かな事象を見ていくことが必要で、時間のかかる作業だ」という言葉が、「相互理解」「国際交流」と簡単に叫ばれすぎている 21 世紀に指針を与えてくれると感じた。

■第4回3月2日(木)

テーマ：[イスラム教] 喜捨（ザカート）の教えと
イスラムのコミュニティ

講師：エンサーリー・イェントルコ氏

会場：東京ジャーミー（渋谷区大山町）

参加者：118名

講義の概要：

イスラム教の教えの基本についてわかりやすく解説された後、重要なイスラムの教えのひとつ、喜捨（ザカート）について詳しく解説。イスラムで非常

に重要な行為とされているザカートは、社会の弱者救済の側面をもっている。イスラムではザカートのほかにも善行や援助活動を奨励しているが、こうした社会活動は、ムスリムにとって宗教的な意味をもち、それによって施す自分自身も報われるという認識のもとで行っている。

また、日本におけるイスラムに対する誤解と偏見はどのように改善したらよいかを語られた。

参加者の感想：

- ・ ザカートの考え方は、社会福祉制度として歴史的に評価される。
- ・ テロにイスラム教が関わっていると感じていたことが、私たちの先入観だとわかった。
- ・ 今の人生だけでなく、次の来世のことも考えるからこそ、今の人生を大切にしているのだということがわかった。
- ・ （休憩時間にトルコのお茶やお菓子がふるまわれたことに関して）うれしかった。ザカートの心に通ずるものを感じた。

■第5回3月16日(木)

テーマ：[キリスト教] プロテスタンティズムの倫理とNGOの“精神”—開発教育の<原テキスト>としての聖書

講師：高橋一氏

会場：早稲田奉仕園（東京都新宿区西早稲田）

参加者：74名

講義の概要：

聖書・キリスト教における開発教育やボランティアの意味、考え方について、自身のこれまでの活動など様々な事例をもとに解説された。

“知る”ことと“解かること”、誤解と偏見、聖書で言う“原罪”の意味。すべての人が重荷を背負って生きていく姿の中に見えてくる、共に生きる社会（コミュニティ）の原型と共同体。聖書からみえるこうした事柄について解説するとともに、NGO活動の可能性について示唆に富むお話となった。

参加者の感想：

- ・ キリスト教はボランティア精神について、やさしく具体的に説いてくれるところが他宗教との違いだと感じた。
- ・ キリスト教の精神が教育の現場に活かせるのではないかと、共感を覚えた。
- ・ 聖書というものがあがりながら、なぜ多くのキリスト教徒が戦争などの大きな過ちを犯してしまうのか不思議に思った。

■第6回3月30日（木）

テーマ：[仏教]

ボランティアから遊戯（ゆげ）へ

講師：玄侑宗久氏

会場：梅窓院（東京都港区南青山）

参加者：126名

講義の概要：

ボランティアという言葉の意味から、正しいと思ってやる行為の中に潜む畏。相手の望んでいることと自分が正しいということの間にある関係性の問題など、問いかけが多くあった。観音菩薩が自在に変化して人々に対応する様子を「遊戯（ゆげ）」と表現するが、ボランティア活動は「誰かのためにやっている」というのではなく、この遊戯の領域で今を楽しみ、今を遊ぶという境地が大事である。

実現不可能なことを目標にして、ボランティアを楽しみとし、遊戯に生きることが理想。など多くの考え方のヒントがあった。

参加者の感想：

- ・ これまで日本においてボランティアがどのような意味をもつか理解できずにいたが、今回ヒントをいただけた。
- ・ ボランティアを損得で考えるのではなく、喜んで楽しめる行為として捉えること、「私」を忘れて相手に応じることの大切さを学んだ。
- ・ ボランティアという言葉に酔い、自分が常に善人、強い立場、というさっかくに陥る危険を固く肝に銘じたいと思った。

■第7回4月13日（木）

テーマ：[新宗教]

新しいスピリチュアリティの探求

講師：島藺進氏

会場：立正佼成会普門館国際会議室

参加者：53名

講義の概要：

ニューエイジの精神世界への探求が始まった1970年から2000年までの動きについて解説。セルフヘルプと死生学などの広い層への浸透はなぜおきているのか。かつての伝統宗教のように、教義に束縛されている教団組織とは異なる精神世界の文化について、事例などから解説される。現代人のかかえる孤独に対して、社会のニーズから生まれてきたスピリチュアリティとボランティアなどの意味深い関係性など考えさせられた。

参加者の感想：

- ・ 信仰をいただいている自分が、いかに固定観念の強いものの捉え方をしていたかを気づかせていただいた。
- ・ これからはスピリチュアリティの社会形成が育まれるべき。私も社会生活の中で今日のお話を大切にしていきたい。
- ・ スピリチュアリティという大きな流れでの明解なお話、現代人のかかえる孤独を解決していく方向についてよくわかり、頭の中がすっきりした。

■第8回4月27日（木）

テーマ：[こころの開発（かいほつ）] ボランティアから共生（ともいき）への目覚め

講師：神仁氏

会場：築地本願寺蓮華殿（東京都中央区築地）

参加者：78名

講義の概要：

「ボランティア」の意味と「開発」の意味するとは何か。スリランカのサルボダヤ運動を事例にあげて、仏教の教えとボランティア活動の接点を探る講座となった。エンゲイジド・ブディズムの活動の求める、心と社会開発を両輪としてとらえていくことの意味についてなど、現代の中で宗教が何をなすべきかの提案があった。

また、八正道や四聖諦のことばの定義など、社会活動と仏教の考え方の共通点について解説があった。

参加者の感想：

- ・ 「同事」というものを知り、ボランティアにとって最も大切なものが仏教にもきちんとあったということを見つけた。
- ・ 「自分の心・まわりの人間関係がうまくいっていないのにNPO活動がうまくいくはずがない」という言葉が印象的だった。
- ・ 国際問題について考える時、外にばかり目を向けがちだが、自分自身や自分の周りから見つめ直していくことが大切だと感じた。
- ・ ひとりひとりの「心のかいほつ」ということがよくわかった。
- ・ 仏教的な開発がこれからの支援のあり方にとっても有効であると感じた。

＜参加者の感想＞

■全体を通して

- ・ 各宗教が均等にあり、布教もないので安心できた。
- ・ 初回でひろ氏が概略を話して参加者の心を宗教に向かわせ、2回目から個々の宗教にフォーカスしていく、という全体の流れがとてもよかった。
- ・ とても魅力的な講師陣でした。
- ・ 多様な宗教の考えを聞ける機会はめずらしく、様々な視点、新たな考えを見ることができ、とてもおもしろかった。
- ・ 宗教とNGO活動についての基本的な知識、また宗教への疑問へのとっかかりになった。
- ・ 異なる宗教から「同じ目的」で話を聞くことができてよかった。
- ・ 社会をよくするために足りないもの、見落としているものに気づくことができた。
- ・ 普段触れる機会のない宗教の建物の中で講義したことがより理解を深める助けになった。
- ・ このような機会があることで、自らの問題について、日本について、考えるきっかけを持てる人はたくさんいると思う。わたしもこの講座を通じて「きっかけ」をもらった。これを忘れずに生活していきたい。

- ・ 宗教がとても身近なものになった。そこからボランティアなど、自分の活動についてもふりかえるきっかけを得た。
- ・ 共生、協働の21世紀を目指していく中で「こころの開発」が重要であると感じた。

■今後に求めるもの

- ・ ひとつのテーマごとに各宗教者でパネルディスカッションをしてほしい。背景にある宗教によって各国のボランティアに対する考え、ひいては各国のNGOの理解につながる。
- ・ 仏教特集のように、各宗派の代表的人物を講師に同じテーマで話してもらおうと、また違う形で宗教を見つめ直せるのではないか。
- ・ 今回はガイダンスのレベルだったので、次回はもっと深い話を聞きたい。
- ・ 心の問題については心理学的要素も必要。次回は現実にボランティアを実践している宗教家や心理学者もまじえてほしい。
- ・ 理論や概念の話ではなく、一個人として何をどのように考え、行動すべきか、共に学び合えるような企画をのぞむ。
- ・ 宗教者同士がお互いの立場を理解しあい、協力していくことがまず必要。宗教紛争をどうしたらなくせるのか。
- ・ 宗教団体によるNGO活動について、報告や検討、批判も含めた講座を望む。
- ・ 日本の問題について宗教の視点から考えたい。

3.活動の成果

■「こころの開発」の理解の向上

様々な宗教の教えをボランティア活動という視点から紹介することによって、よりよい社会の開発のためになぜ「こころの開発」が必要なのか、社会の開発とひとりひとりの「こころの開発」がどのように結びつくのかを考える機会を提供できた。

■宗教に対する偏見の払拭

宗教施設に身をおき、宗教者からお話を伺うというスタイル（一部評論家の場合あり）によって、講

師の真摯な人柄や活動、厳粛な信仰の場の雰囲気を感じることができた。また参加者が懸念に感じている現実の社会問題に対する考えなども聞くことができた。

その結果、宗教に対する敷居が低くなり、また、偏見の緩和につながった。

■社会参加の促進

ボランティアや社会問題に関心はありつつも、自分自身や日本社会が様々な問題を抱える中で人を助けられるのか、海外への協力をすべきなのか、といった、活動に参加することへの疑問を抱いていた人は多かった。そこに精神的な裏づけを提供されたり、様々な社会参加のあり方、活動のあり方を提示されることによって、積極的な社会参加の促進につながった。

■視野の広がり

講師の講演のほかにも参加者の様々な意見を共有することによって、より多くの立場の考え方や活動を知ることができた。それにより、参加者はより視野を広げることができ、また建設的な批判精神を身につけることにつながった。

■人的ネットワークの広がりと団体間の連携協力

今回の講座は、開発教育団体、国際協力団体、宗教団体、社会参加に関心のある一般の層など、様々な層の団体・個人が出会う場となり、個人間・団体間のネットワークづくりの基盤をつくることにつながった。

4. 今後の課題

今回の講座では、各宗教の基本的な説明とそれぞれの教義のうち「ボランティア」に関する部分を取り上げた。今後はさらに具体的な議論を深めて行きたい。

■「こころの開発」の深化

「こころの開発」の意義は伝わったが、具体的にどう「開発」していくのか、また、ボランティア活動という目に見える活動と、それを行う内面のこ

ころの開発をどうつなげるのかの具体的な方策についての検討は、これからの議題である。

参加者自身の「救われたい」という気持ちや、野宿者問題や引きこもりなどの日本社会の様々な問題を見据えつつ、国際協力を必要とする現場とのギャップをどうつなげるのか、具体的な議論が望まれる。

■国際協力活動における宗教理解の深化

世界各地で実施されている国際協力活動において、宗教の理解は非常に重要である。宗教を深く理解することで、活動地の文化や慣習、考え方を理解すると共に、よりよい協力活動の展開が期待される。そのためにも、概論的な理解とともに、各地での宗教に関わる体験の共有や意見交換する機会が求められる。

■教育における宗教を考える

日本における公教育の場では、宗教を理解するための教育活動はタブー視されているのが実情である。しかしながら信仰を持つ日本人は多く、宗教について公平な見方を育てるためにも、学校教育の場でのような活動がありうるのか、検討が求められる。

■「こころの開発」を未来への軸とするために

ボランティア活動や社会活動を軸に、世界各地で活動するNPO、NGOはこの数年の間に驚くほど拡大している。また、質的にも向上してきている。国内のみならず海外においても、国際的な視野をもって様々な社会問題を構造的に捉え、問題を提起する組織も増えてきている。環境問題、人権問題、経済格差など課題テーマも多岐にわたっている。

こうした問題をフィジカル（物理的・身体的）に捉える側面とポリティカル（政治的・社会的）に捉える側面とがある。そのどちらも重要である。しかしわたしたちが求めるもうひとつの側面がある。それが宗教的、精神的なこころの問題である。

多くの社会活動は、特に日本においてこの「こころの開発」の側面を意識してこなかったように見える。豊かな者が貧しき者へという図式ではなく、共に生きることでできる社会を創るためには上記の二つの軸に加えて、「こころの開発」を意識化していくことが大切になると思われる。